3

小樽市の蜂対策の変遷について
○反町士朗（小樽市保健所）

- ・昭和40年代より市民から蜂駆除要請が寄せられる。
- ・昭和51年より保健所職員による駆除を開始する。
- ・昭和63年より駆除の一部を業者委託として行なう。
- ・平成2年より一般住宅等についてはすべて業者委託駆除とする。
- ・平成4年より事業所を含めて全面的に業者委託駆除とする。
- ・平成9年環境衛生係から動物衛生係へ所管が変更となる。
- ・平成10年駆除費用の一部受益者負担を導入する。
- ・平成11年より事業所等については業者紹介のみで全額自己負担とする。

蜂苦情届出件数と処理件数の推移
(過去10年間)

年度	届出数	処理数	刺傷者数
89(H1)	185	174	57
90(H2)	527	416	55
91(H3)	1201	909	106
92(H4)	571	458	61
93(H5)	527	422	74
94(H6)	760	694	68
95(H7)	893	799	64
96(H8)	608	529	100
97(H9)	892	588	98
98(H10)	953	600	71

5 数種の蚊におけるアカバネウイルス増殖能 山下伸夫(東北農試・家畜虫害) Propagation of Akabane virus in some species of mosquitoes Nobuo Yamashita

東北地域の野生・飼養鹿においては、アカバネウイルス抗体陽性率が極めて高く、鹿が病原保有宿主になる可能性が示唆されている。本研究は鹿と牛から吸血する力の種類相を明らかにし、共通吸血種のアカバネウイルス増殖能の解明を目的とした。場内の鹿舎と牛舎でライトトラップを用い採集した飽血力についてELISAで吸血源を同定した。さらにアカバネウイルスをマイクロインジェクターで胸部に接種し、その後の虫体内のウイルス消長を調べた。鹿舎、牛舎共にシナハマダラカが全捕獲数の60%以上を占め、その飽血個体率も70%以上だった。その他の種構成も同様にアカイエカ、ヤマトヤブカ、コガタイエカ、オオクロヤブカが比較的多かった。これら5種の蚊はすべて牛とシカから吸血した。未吸血の状態ではウイルス接種したシナハマダラカ、オオクロヤブカおよびヤマトヤブカでは、ウイルスが体内で徐々に減少し、再び増殖することはなかった。しかし、飽血後産卵したシナハマダラカにおいては、ウイルス接種後10日からウイルスが再検出され、15日目にはウイルス価が高くなり、20日目には再び消失した。

4

札幌市におけるねずみ昆虫相談の四半世紀の推移
長船安久(札幌市保健所環境衛生課) The trend of requests about rats and insects consultation from general public in Sapporo while a quarter century OSAFUNE, Yasuhisa

札幌市は1972年に政令指定都市となり、四半世紀を経て現在にいたっている。その間の、保健所で受けた、ねずみ昆虫(一部節足動物を含む)に係る市民からの相談の推移について報告する。

保健所には様々な市民からの相談が寄せられるが、うち、環境衛生に関する本市保健所への相談のほぼ90%は、ねずみ昆虫に係るものである。

ねずみ昆虫相談の総件数は1975年には年間1,000件を超え、1987年には初めて年間2,000件を超えた。

4年間移動平均で総件数を見ると1977年に年間1,000件を超し、1985年頃まで年間1,000件そこそこで推移していた。その後、1986年には上昇に転じ、1988年から1998年にいたるまで、2,000件を超すようになった。

この1980年代後半の不連続点は、いわゆるバブル経済の進展と並行した札幌の都市構造の変化を示唆している。

また、年によって総件数が突出することがあり、要素を種類から見ると、1977年はワラジムシ・アリ・ナンキンムシであり、1987年はアワヨトウであった。

ハチについては1988年に初めて年間1,000件を超し、以後、1991年から1998年にいたるまで、コンスタントに1,000件を超えるようになった。1998年現在では総件数の50%以上がスズメバチなどのハチの相談となっている。

6

日本産マダニからのスピロプラズマ分離例
○渡辺百合子・藤田博己(大原総合病院・大原研究所)・野田博明(蚕糸・昆虫農技研) Isolation of spiroplasma from Japanese ticks. Yuriko Watanabe, Hiromi Fujita and Hiroaki Noda

1996年から1998年に日本産マダニ類からの培養細胞を用いたリケッチア分離の過程において、偶発的にスピロプラズマを分離した。分離例は北海道産のシュルツェマダニからの1例(IP2B株)とヤマトマダニからの2例(IOSP2株とIOSP3株)および長野県産のヤマトマダニからの1例(IOSP1株)の計4例で、供試個体はいずれも植生上から採集された未吸血成虫である。いずれの分離株も培養細胞(L929)存在下で良好な増殖性を示した。スピロプラズマ用SP-4培地へ移植したところでは、その増殖性に株間で差異がみられた。IP2B株とIOSP1株については、16S rDNAの塩基配列を決定し、これらは互いに近縁であることを確認した。